

パウロは、コリントの教会に主の晩餐の伝承を引用して、主の晩餐が本来の内容にふさわしい形で行われるように求めています。23 節の「主から受けたものです」とは原始教会からの受けた伝承という意味です。25 節までが伝承の言葉で、26 節はパウロが加えた意義づけです。

パウロが伝える主の晩餐伝承では、マルコ型の伝承とは異なり、25 節の「飲む度毎に」と何回も繰り返されることが前提にされています。また、パンを裂くことにも、杯を回して飲むことにも、「わたしの記念としてこれを行いなさい」という言葉がついています。聖餐はイエスの「パンを取り」「感謝(または讚美)の祈りをささげ」「それを裂き」「与えられる」という四つの行為を表すように整えられてきました。主の晩餐は、過去のイエスの十字架の死を思い起こし、将来のキリストの来臨を待ち望みながら、現在復活させられたイエスの死といのちに与っていることを告白するという意味で、キリストを記念する教会の行為です。また、「これは新しい契約である」という言葉によって、原始教会のキリスト者は、自分たちがイエスの血によって立てられた神さまとの新しい契約に与っていることを自覚したのです。

27～28 節は文脈が無視され、誤解されてきました。27 節の「ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする」という文章は、完全に正しくないと主の晩餐を共にできないという意味に誤解されました。荒井献氏によれば、「ふさわしくないままで」を「まだ洗礼を受けないのに」と解釈するのは、早くて4世紀だそうです。パウロは大飯を食べて酔っ払っている状態で聖餐に与るにはふさわしくないと論じているのです。28 節は食事での自分たちの行動がどのように教会の兄弟姉妹に影響しているか、また隣人たちと愛と思いやりを抱いて生活しているか、を確かめるようにとの勧めです。

家の教会では、キリスト者は共に食卓を囲み、そこで食事と聖餐を行ない、讚美歌を歌い、祈りを捧げました。聖餐に囲まれた食事の部分で、部外者が強制的に締め出されたとも思えません。また、言葉による礼拝と聖餐が別々に行われた形跡もありません。パウロは、主の晩餐に与る者は明らかに洗礼を受けるということを、当然の前提としています。しかし、聖餐に与ることができるのは、洗礼を受けてキリスト者になった人だけとは言っていません。ただ、それが暗黙の前提になっているのです。

荒井献氏は著書「初期キリスト教の霊性」のなかで、「聖餐」は教会共同体を持続するための「統合儀礼」であるが、それは非信者の間にバリアとなるものではない。神は信者・非信者を問わず、万人を義と認めるものであり、その恵みへの応答が「聖餐」の原型だからである。」と記しています。聖餐のあり方が問われている現在、私たち一人ひとりが聖餐の意味を問うことが必要であると思うのです。